講演

お茶の水女子大学ECCELL第三回保育フォーラムから

高橋清賀子氏・大戸美也子氏「幼稚園草創期の保育者に学ぶ」(2)

― 初代保姆 豊田芙雄の挑戦

構成／安治陽子（大学教員）

前号に続き、二〇一三年十一月十六日（「幼稚園の日」）に開催された、お茶の水女子大学の教育研究プロジェクトECCELL*主催の保育フォーラムについて、その後半の内容を報告する。

大戸美也子氏（武蔵野大学名誉教授）に、幼稚園草創期における豊田芙雄ら保育者の挑戦と、それを現在および未来の保育へとつなげる視点について論じていただいた。

＊文部科学省特別経費「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」事業。リーダー：浜口順子教授。

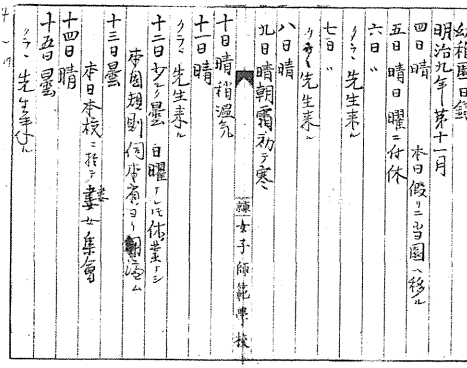
大戸美也子氏講演「豊田芙雄　幼稚園教育への挑戦」

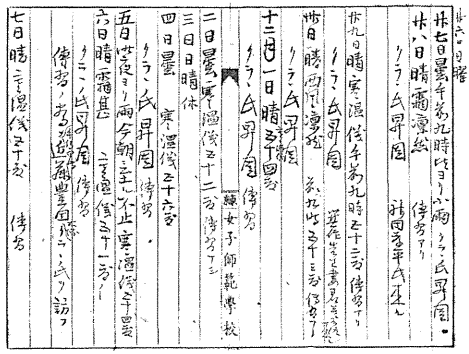
この写真は、二〇一二年茨城県大洗町で開催された企画展（前号参照）のポスターに使われた写真で、芙雄が幼稚園の仕事を始めた三十歳の頃のものである。当時、水戸藩の重臣の一族に連なる芙雄は、開明派の夫の暗殺に続いて、叔母一族が藩内の抗争に巻き込まれ、幼い子どもたちを含めて全

安治陽子（あんじようこ）
お茶の水女子大学人間発達科学研究所特任講師。

員が処刑されるという、考えられないほどの身内の不幸を浴びている。そうした苦しみをのみ込んで、幼稚園という未知なる世界へ挑む覚悟が感じられる、そういう面構えの写真である。

芙雄の生涯において、幼稚園教育時代は実は短く、九年半ほどである。四十歳で外国へ行き、五十歳から八十歳まで女子高等教育に携わるが、芙雄は短い幼稚園教育時代に実に多様な体験をしたと言える。わが国初の幼稚園を開設することは、いわば「ナショナルプロジェクト」への参加であり、芙雄はその推進者であった。開設直前の一八七六(明治九)年十一月四日～一八七七(明治十)年三月十七日までの四か月について『幼稚園日録』(**左上図**)が残されているが、「学びつつ教える」前向きの様子が読み取れる。


幼稚園日録
明治九年第十一月
四日晴　本日假リニ当園ヘ移ル
五日晴　日曜ニ付休
六日〃　先生来ル
七日〃　先生来ル
八日晴
九日晴　朝霜初テ寒ク
十日晴　稍温気
十一日晴　先生来ル
十二日〃　日曜　仏学ニ
十三日晴　本園翌朝開店有ヨリ繁盛ム
十四日晴　本日本校ニ於テ華士集会
十五日晴　先生来ル


十六日曜
十七日晴　寒気九時ヨリ小雨ヲ降ス　伊勢ヨリ
十八日晴　霜凍結　伊勢ヨリ
十九日晴　寒温低午前九時五十三分　伊勢ヨリ
二十日晴　寒温低午前九時五十三分　伊勢ヨリ
二十一日晴　五十四分　伊勢ヨリ
二十二日晴　寒温低五十二分　伊勢ヨリ
二十三日晴　休
二十四日晴　寒温低五十六分
二十五日晴　今朝三度ヨリ霜降　寒温低五十四分
二十六日晴　霜甚　寒温低五十一分
二十七日晴　寒温低五十分　伊勢

1　幼稚園教育への三つの挑戦

芙雄は、幼稚園教育時代に、大きく三つの挑戦をしたと思う。

一つは、幼稚園「教育理解」への挑戦。当時の日本には、就学前の子どもたちを親元から離して一か所で一定時間指導するという前例がなかった。就学前の子どもたちを指導するとはどういうことなのか、幼稚園教育を理解することが最初の挑戦であったと思う。後で詳しく述べる。

二つ目は、実際に教具を使って子どもたちにどう指導するか、幼稚園「教育実践」への挑戦である。当時、教育といえば「読み・書き・算術」の世界であり、遊んだり歌ったり、お遊戯をすることが幼稚園指導の中身となると、遊びに使う物も、皆で唱和する歌も、無い物尽くしであった。例えば、折り紙など和紙を自前で染めて手技用の教材とし、歌は既存の歌詞を改訳して「保育唱歌」を開発、伴奏楽器も琴や笛、雅楽の笙(しょう)を活用するなどして柔軟に対応した。保育の現場で子どもたちと遊び、歌うだけでも、そこにはさまざまな工夫が求められたのである。

三つ目は、それら指導法を後進に伝えること、幼稚園「教育伝達」への挑戦である。幼稚園教育の現場に参加して学ぶ「保姆見習法」を導入して保姆を養成し、その卒業生たちの活躍によってわが国の幼稚園教育は全国へ広がったのである。芙雄はまた、その九年余りの短い幼稚園教育時代に、幼稚園の指導概要を『恩物大意』としてまとめ、恩物のさまざまな応用の仕方を具体的に示す『幼稚園恩物図形』を制作し、また保育唱歌の選定なども精力的に行っており、草創期の幼稚園教育の普及、伝達に多大な貢献を果たしたと言える。

芙雄をはじめとする草創期の保育者たちは、このように、幼稚園教育を理解し、実践し、伝えるという三位一体の努力をしなければならなかったのである。

本日、焦点を当てるのは、一つ目の幼稚園「教育理解」への挑戦である。当時の日本には幼稚園のモデルは無かったが、書物はあったのだからそれらを読めばわかったはず、あるいはフレーベルの恩物をまねてやった、といった定説があるかと思うが、私はそうは思わない。幼稚園開設前後に、幼稚園を知る媒体となった書物は、わずかに二冊。一つは、桑田親五訳『幼稚園（上・中・下）』（一八七六年一月～一八七八年六月刊）、もう一つは関

信三訳著『幼稚園記』（全三巻及び附録）（一八七六年七月～一八七七年十二月刊）だけであり、幼稚園教育に関する考え方も指導法も異なる内容であった。通常であれば二冊を平行して読めば混乱してしまうところ、芙雄は本筋をつかむすごい力があったのだろう。彼女の幼稚園教育理解が当時の世界水準のものであったことについては、後で触れる。

ここで、幼稚園教育理解のために重要な役割を果たしたのが、最初の幼稚園の主任となったクララ・チーテルマン（松野）による伝習活動である。松野クララはドイツのベルリン生まれの人で、明治九年、ドイツに留学していた松野礒（はなぢ）という方と結婚するために来日された。日本に来た経緯については、立浪澄子先生がベルリンまで出掛けて調査され、その内容は『幼児の教育』誌に掲載されている（第一一一巻第四号）。しかしクララがベルリンでどのような養成を受けたかを裏付ける証拠は得られず、その当時、幼稚園の勉強をしただろうということしかわかっていない。とはいえ、幼稚園開園の年に、幼稚園教育を理解し、それを伝えるだけのコミュニケーション能力を持ったうら若き女性が来日したことは、日本の幼稚園教育界にとって大変幸運だったと思う。

幼稚園開設直前の一八七六（明治九）年十一月六日から翌年三月十七日まで、松野クララ直伝の勉強会が開かれた。具体的にどういうテキストを使って伝授したかということはまだわかっていないのだが、この勉強会の内容を芙雄がノートに取っており、その学習ノートから推理すると、『Der Kindergarten』（H.Goldammer, 1872）ではないかと私は考えている。この本は、Goldammer の単著ではなく、前文と結論部分の四十ページ以上を Marenholtz-Buelow 夫人という方が書いている。この方は、フレーベルの死後、ヨーロッパにおいて幼稚園を宣伝した方で、この本の前文には指導原理が示されている。この前

文の文章が、芙雄の「代紳録」（前号参照）の記録の中に出てくるものと非常によく似ているのである。

これらの本を通して、結局、芙雄はこういう悟り方をしたと思う。――幼児教育は、「読み・書き・算術」の伝統的な教育とは異なるものである。子どもの天賦の才能、子どもの生まれながらに持つ力を認めつつ、手と目を使って道具を動かし、その感触、感覚を通して、自分の周りにある事物の形や大きさ、あるいは美しさを感得すること、言い換えると物の操作を通して知識と美と現実認識を身に付けていくことこそが、幼稚園教育の指導の要なのだということに彼女はたどり着く。芙雄は学習ノートである「代紳録」を何度も何度も書き換えながら、だんだんとこうした考えに至るのである。これは今でも参考になる資料ではないかと思う。

2　芙雄の挑戦と奮闘を、現在と未来の保育活動につなげる

明治初期、幼稚園教育を担う最初のランナーとしての豊田芙雄の為したさまざまな挑戦と奮闘は、現在と未来の保育とどうつながるかということを次に考えてみたい。

芙雄の最大の仕事は、十九世紀後半の世界水準の幼稚園教育を、一八七〇年代の日本に築いたことである。当時の世界水準というのはフレーベルの教えであったが、その本質をよく理解し上手にこなして、幼稚園開設というナショナルプロジェクトを、芙雄を中心に、世界のどこに出ても引けをとらない形で実現したといってよい。それを裏付ける資料を紹介する。

芙雄は東京女子師範学校附属幼稚園を辞めた後、イタリアへ赴くが、文部省からの命を受けイタリア、フランスの幼稚園視察を実施した。イタリアの幼稚園視察の報告が、明治二八年の『大日本教育界雑誌』に載っている。

「幼稚園は九十人を三組に分かち、一組三十人、教師一人、助手一人にて、保育の責に任ず。而して、甲の教場と乙の教場との間に小部屋を設け、外套、弁当等の置き場所とする。科目は、フレーベルのシステムをそのまま用いて、些少の変換も見ず……」

このような報告ができるのは、彼女がフレーベルのシステムをよく理解していたからこそであり、それ故にローマ市内の幼稚園教育の特色、ないしは水準を即座に判断できたと思うのである。「些少の変換も見ず」という言葉からは、フレーベルのシステムの導入にあたり自分たちがどんなに創意工夫を凝らしてきたかを言外に伝えてはいまいか。さらに、この文章の最後は、「その他一般の幼稚園であれば、皆大同小異なれば、あえて特に謹述せず。」という言葉でくくっている。何という自信にあふれた言葉だろう。この後、芙雄はフランスへも行っているが、新しい発見をしていないのである。

今、二十一世紀となり、子育ての環境は大きく変わった。私たちは今、いろいろな保育活動を展開しているが、二十一世紀の世界水準の乳幼児教育を築くこと、これが、芙雄に負けない、あのエネルギーを頂いてすることだろうと思う。例えば、今日では芙雄の時代には考えられなかった0歳からの子どもたちの成長・発達を視野に入れた乳幼児教育、その充実が求められている。

また、子育ての場が家庭よりも保育園での比重が増す状況も出てきており、どうやって親の機能を生かしていくかという発想も以前より意識してしなければならない時代である。

それから、子どもたちを育む地域資源も多種多様であり、公園や遊具、さまざまな機器など子どもたちの目の前にあり過ぎるほどあるのだが、それを子どもたちの発達に合わせて適切にチョイスして活用して保育活動を創っていくということも非常に大きな仕事ではないかと思う。